記念講演　姜尚中氏の講演に惹きつけられた時間
「歴史的危機の時代に、共に生きる、共に働く社会を創る」

姜尚中氏は冒頭に「歴史的危機の時代」の意味をどのように捉えるかという事から話されました。日本における 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と原発事故は、日本の歴史的危機であり、原発事故であれだけの状況が起こった中、誰も責任をとらないまま原発を再稼働させようとしている。日本社会は戦後 70 年を前に大きな変化に差し掛かっている。そして韓国では、セウォル号の事故が発生し新興国の優等生と言われてきた韓国と、日本はまるで合わせ鏡のように危機の時代を国民に露呈した。

イギリスのサッチャー政権から始まった新自由主義からグローバル経済への流れが、日本や韓国にも流入する中、社会が痛み、この 20 年は、社会的包摂が失われ、困難を抱えた人たちを排除する方向に動いてきた。日本も、韓国も毎年多くの自殺者が出ている。社会より個人、共生より競争という流れから『公』と『私』の構造的転換が起こっている。

グローバル化によるマーケットの暴走は止められない、そして「第４の矢は戦後レジームからの脱却を示し、『共に生きる、共に働く』とは真逆の富国強兵型社会の国、社会へとなることを危惧しています。

まさに「国家が強くなり、社会は弱くなる、富益々富、貧益々貧へ」の構造が生まれている。

先程、パク・ウォンスン先生の方から、「市民社会」という言葉がありました。もう忘れられた言葉かもしれません。市民が創り出す独自のネットワーク、こういう中で働き、学び、共にいき、ともに支え合うコモンズとして、人々がお互いに、労働や消費、生産やあるいは子育てや教育、そしてエネルギーなど、人間の生活にとって不可欠なものを共に考え、連帯し合う、そういう強い社会は実は、人々をより幸せに向かわせるということを我々は歴史的に知っているわけです。国家がどんなに強くても、社会が弱ければ、人々は決して幸福ではありませんし、また希望というものも生まれないのです。

協同組合、NPO などの非営利団体の台頭に期待を持っています。現政権下の強い国家づくりによって、社会は弱められてしまうけれど、私たちは強い社会とそのための拠点を作っていかなければならない。それが『協同』という力で連帯が生出されるならば私たちには、新しい生活スタイルが創られるのであろう。

本日、パク・ウォンスン市長のメッセージは予想していなかった嬉しい出来事でした。また、日本と韓国の連帯がこのように進められている姿に感動し、講演内容も変えました。最後に、この全国集会で、ここから、この福岡から海を越えた働く者たちの連帯が広がることを期待します。と述べ講演をまとめられました。

全体会　会場のようす

控室で韓国労協連会長と握手する姜尚中氏

パネルディスカッション
「農と自然、つながる命―未来の仕事を創造する」

【国分ほのぼの児童クラブ】
「僕たち、私たちは仕事の出来る小学生です」と元気に発表してくれた２人。鶏をしめて食べることを子どもにさせるのを批判する人もいる、という問いに「鶏がだめなら、豚や牛だって同じ」と答えた蜂須賀晃星くん。将来はどんな仕事がしたい？と聞かれて「公務員とか」と答えた天生目紗帆さん。どちらも会場から暖かい笑いが起こりました。自然と共に生きる日常の豊かな取り組みに、会場からは圧倒的な共感がありました。写真右は、国分ほのぼの所長の岡元ルミ子さん。

山下惣一さん

【農民作家　山下惣一さん】
ほのぼのの子どもたちの日常は、私たちの小さい頃だったら当たり前の事、今は辛い仕事、汚い仕事、暗い仕事を見えないところでやらせて、おいしい肉ばっかり食っていて、これが当たり前だと思わせていることが問題なんでしょうね。政府は農業を成長産業にするといっているが、農業を辞める人がどんどん増えている中で、それを集めて集落営農、集団化、法人化をして、どんどん大きくしていくわけです。そこで、経営が発展したら、もっと大きいものに吸収されるわけです。そういう農業を再生していこうとしている。ところが世界の流れは逆になっていて、農協の会長さんが 2012 年は国連が定める協同組合年であったことを話されましたが、今年は実は国連が定めた「国際家族農業年」なんですよ。日本では全く話題にならない。農文協から翻訳本が出ていますよ。「家族農業が世界の未来を拓く」と。今の日本の国の方針は、小農を潰して大農場にしていこうという動きがある。農地解放が失敗だったといっているわけですから、農地法を撤廃して、誰でも使えるようにする。これが「戦後レジームからの脱却」の１つであり、また昔に戻すということは我々が育ってきた環境から言えば「反動」ですよね。

宇根　豊さん

【農と自然の研究所　宇根豊さん】
戦後になって、資本主義の経済成長から取り残されないために、百姓を資本主義に合わせるためのリーダー、指導者、学問、政治がいるんだといった風潮がありました。でもこれは問い直されなければいけない。こうした学問教育の方向性の結果、今みたいな大繁栄と同時に、こんな無様に、こんなに情けない社会になったからです。最近、どうやら資本主義も終わるんだという話が出てきましたね。理由は、日本でいえば人口が減っている。ヴァーチャルのお金が暗躍して、バブルがはじけて、つぶれる、石油がなくなる、エネルギーが枯渇する色々ありますが、内側からこれを見ると、資本主義がこのまま経済発展をする中で、効率を求めすぎて、仕事自体がくだらないものになって、分断されていく。人間らしい仕事ができなくなってしまうのではないかという危機があるんです。人は、俺が俺がではなく、人間の欲望を捨て去って、百姓という仕事に没頭しているときが、天地の一員として、自然の一員となっている状況であります。これが人間と自然の中での一番幸せな関係なのではないかと思っています。

永戸祐三さん

【コーディネーター　永戸祐三さん】
今日は、本当の意味で命をつなぎ、命を支え合う社会のあり方を農業の世界から考えるパネルディスカッションであったと思います。